

大沢伸

おおさわ・しんいち

職業の「一部分」であるDJで日々アップデートを続ける音楽家

2カ月に一度、我々は彼に会える。「ワールド」「世界」の定例イベントで。この日、珍しく彼は新風館に現れた。同館の5周年記念のイベントに、「喋る人」として。どちらかという「静」の表情を見慣れた者にとっては、彼、大沢伸一の肉声と笑顔は特別なものであった。

職業は音楽家と称する。「プロデューサーでもないし、ミュージシャンという演奏家になっちゃうんで、音楽にまつわることのスペシャリストでしょうね。選ぶこと、つくること、そして聴くこと、それに対し

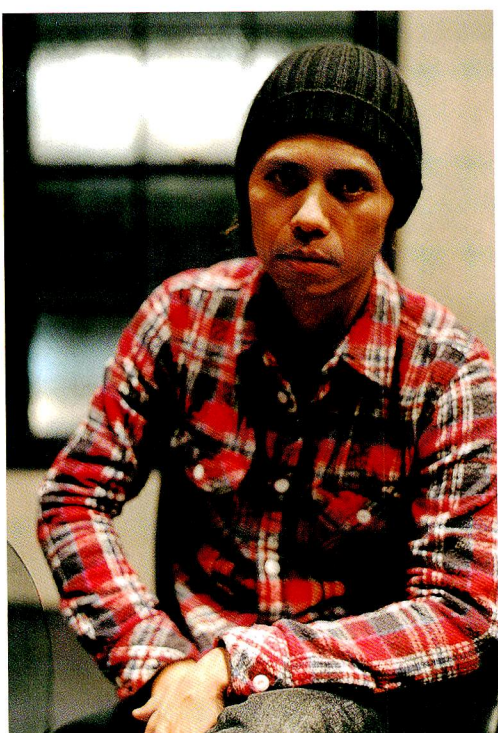
のないことだし。傑出したものにスポットを当てられる環境は70年代からあるわけですよ。'80年代のパンク・ニューウェイヴにしても、京都だからあり得たわけです。それを容認できた懐の深さがあるんですよ。それと一般的に言われる京都人気質には、個人的には何の関係もないと思ってるんで。音楽以外のフィールドで僕はコンタクトしてないから良かわかんないっていうのもあるんです。京都人も、全ての人が同じではないわけで、少なくとも僕の接する人たちに嫌な感じはないです。気難しい人はいてもね。」

平準化の東京、一点傑出の京都
その分析はあくまでも冷静

のがある土地が良いですね。本当に、京阪神にはそのうち帰ってこようとは思ってます。土地とか家とか買うならこっちの方が良いかなあって。向こうは地震があるやろな、とかそういうレベルですけどね（笑）。それはそれで、グローバルな考えの持ち主なのだ。

一番好きなことを仕事にして
図らずも、10年以上が経った

MONDO GROSSO」という、'90年代初頭に現れた京都の星。その中心人物として活躍しながらも、職業としては洋服の世界に生きていた。「音楽を仕事にする気はなかったん



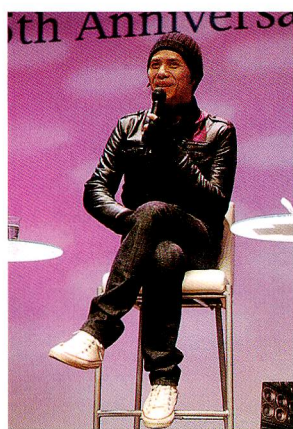
て書くこと、全て。中でも、今の中核を成すのはDJであり、それはバンドのツアーに近い感覚だと言う。「過去に手掛けたアルバムや楽曲から」僕の作風とかイメージとかを云々されるのは一般的なことでしょうけど、でもそれは僕にとっては僕の音楽性の中のごくごく一部なわけで、『24』じゃないけど(笑)リアルタイムで変わっていかうわけですよ。で、何が一番新しいの？と言われてときに、デブリーでアップデイトしていきけるDJというのが一番新しい。それ(その都度のDJ)が僕の最新の活動な感じで、それを見て「ああ、大沢は今こういう感じなんやな」と思ってたんですけどね。その現場にいない人に、僕の音楽性を論じられてもね。スポーツであれ芸術であれ、最後のレコード記録が、人々の最新の記憶になる。「辰吉丈一郎がチャンピオンになった時が最も記憶には残っているかもしれないけど、次の日からはトレーニングをしているかもしれないし、何て言うか、現状はそこじゃないですか。僕のは不甲斐ないボクサーの戯言かもしれないけど(笑)」。

京都人にはあったとしても 京都に嫌なイメージはない

そのDJという仕事(の一部)で、今も京都に定期的に訪れ、つぶさに京都を視ている人である。世界との比較をできる方でもある。上下ではなく左右の「差」として、京都は変わったのか、変わっていないのか。「どっでしようね。ずっと知ってるわけではないし、京都が特別様変わりしたとは思わないですね。特に僕が接しているクラブという盛り場で思うのは、相変わらず京都の人が少ないなあ、と。まあ学生の街ですからね。メトロはまたちょっと違う京都人のもの、かもしれないけど。良いか悪いかは解りませんがね。『毎月やれば来る』みたいなのは、純粹にクリエイションには跳ね返らないというか、やっぱり評価が高いから支持されるべきだし、そういう風になれない部分がありますよ。でも僕は京都に嫌なイメージはないんですよ。京都人にはあるけど(笑)、それは京都とは関係

京都で音楽を仕事にする機会を得、東京に移っても「東京が地元」と思うこともない。「おしなべて言っちゃうと東京は平均化された街ですよ。(笑)尖っているように」見られがちですけど、割と平均点みたいなものをよしとする風潮があるように思います。京都は逆に一点傑出している方が評価されるでしょうから。僕の中で京都というのは、僕が京都にいた頃がそうだったのかもしれないですけど、尖ったイメージですね。それも一概には言えないという注釈が付く。

取材後半に舌が暖まる。時に笑いを交えて、闊達に話してくれたのだ。「良い意味で、京都は京都人が思ってるほど良い街じゃないんで。伝統とか文化とか、ものすごいものがあるんですけど、敷居が高いかという、気さくな街じゃないですか。だからこのままで良いと思う。ただ10年前はこんなに観光地化はしてなかったな。するのであればトコトン行きやいんですよ。もっと「カネカネ」みたいな(笑)。それはそれでムチャクチャ格好良くなりますよ、うん。面白いっすよ。そうだったらいっぱい集まってる場所ができたね。京都人ばっかり集まってる場所ができたね。パリなんか本当にスノッパな人たちは「この一区域にしか住まない」っていうのがある。でも中には完全にセルアウトした観光地もある。悪口でせめぎ合うより、行くところまで行って発展すればいい」。

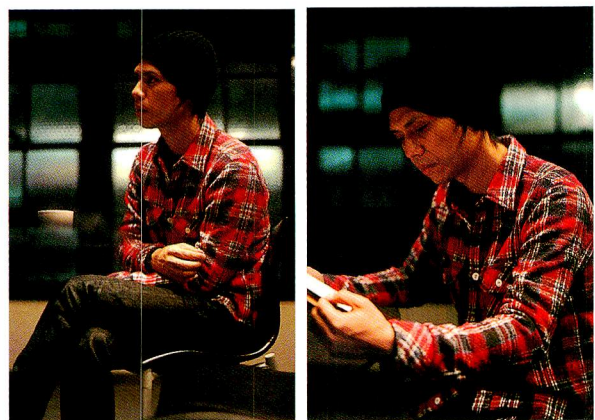


ですよ。一番好きなものを仕事にしてしまうと良くないと思っていたから。二番目とか三番目なら嫌なことも妥協できるのかなと思っ。お声がけをいただいたので、一年くらいなら良いかと」始めてから10年以上になる。「授業の間の休み時間がずっと続いている感じ」。解りやすい表現とは裏腹に伝わるのは覚悟のほどか。「覚悟というか、音楽に転化するの一番やりやすいだけで、音楽がみんなとシェアできないものになっていったらいい辞めても良い」と。それは音楽を辞めるということではない。音楽という辞められないから続けていることについて、趣味と呼ぶ環境にいるか、仕事と呼ばれる環境にいるか、それだけだ。

「すごく恵まれていると思います。圧力もかからず、経済的な対価を得られているということも、ものすごく」。謙虚な言葉が続く。取材も終わりに近づいた頃、言葉のテンションに熱を帯びてきた。意外にもそれは、力説に近いものだったのである。「極端なことを言う、僕が18歳くらいの時に好きだったパルクとかニューウェイヴとかっていうのは、誰も知らなかったし、誰も共感しなかった。一緒にバンドをやっている口でもないヤツ以外は、周りの誰に訊いても知りもしなければ理解もされない。嫌悪感すらもたれる。そういうものを一番格好良いと思っていたセンスが、ビジネスとして成立していることが本当はおかしいんですよ。だからずっと『そんなはずはないよな』と疑ってるし、そう思いながら10年も経っているだけのこと。これは何だ。謙虚なのか、何なのか。罪悪感すら感じているようでもある。何がそう言わしめるのか」。

それは美学か、別の何かか 冷静な弁舌家に学ぶこと

人が仕事を選ぶとき、その基準は様々だ。「休みさえあれば仕事内容もサラリーも気にしない」「実入りが良いければ休みも仕事内容も問わない」「好きなことさえできれば、他は要らない」。どれを選ぶと、重要なのは「職業として選択する心構え」だ。敵を知り、己を知れば、これ百戦危うから



ず。度を越した謙虚さは嫌味だと言うが、そんなものは露ほども感じない。圧倒的な知名度を持つてなお、仕事環境に恵まれたことを感謝する。ストイックとも違う。そう、この人は腹を括って生きている。だからこそ、可能な限り生真面目にぶえようと思えるのではないかと。とても慎重な話し方についても、誤解を生まないように細心の注意を払い、豊かな語彙から言葉を選ぶのが責務だと考えているのではないかと。だから言葉の数も多くなる。巷間言われるイメージほどに、決して真黙ではない。

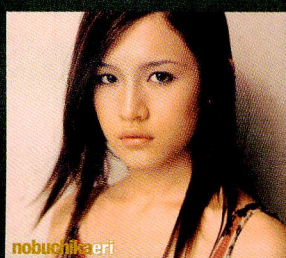
「何のために生きるか?」。それを哲学と呼ぶならば、「そのためにどう生きるか?」、それが美学だ。大沢伸一という音楽家を持っているのは、美学のようなもの、ではないか。「滋賀県出身、音楽的には京都出身」という彼の京都評が希有であり、貴重であることは真だろ。次回、彼が京都に現れたとき(@ワールド「世界」/5月20日・予定)、クラブという場で、イベントという場で、彼の肉声を聞くことは難しいかもしれない。プレイから音楽性以外の何かを感じるのも、正直難しいかもしれない。だからこそ、この時に熱いコメントとインテリジェンスに、今度は我々が感謝すべきだと思うのだ。

大沢 伸一 おおさわ・しんいち

'67年生まれ、滋賀県出身、血液型O型。「MONDO GROSSO」のリーダー兼ベーシストとして、'93年アルバム「MONDO GROSSO」でデビュー。セカンドアルバム「Born Free」発売後のツアー後、バンドは解体。以降、UA、MONDAY満ちる、birdなど、積極的にプロデューサー・ワークを手掛ける。'02年には'02 FIFAワールドカップ公式アルバム「NEXT WAVE」をリリース。「これからは僕のような『自分では唄わないけど、良い音楽つくる自身はあるよ』という人を積極的に発掘したい」と言う。昨年に本誌でインタビューしたFPM田中知之さんと列頭は友。当時の本誌の原稿を読み、「彼らしいコメントだなあ」と破顔一笑した姿が印象的であった。

nobuchikaeri 信近エリ

ソニー・ミュージックアソシエイテッドレコーズ No.AICL-1695 3059円
久しぶりの大沢伸一全面プロデューサーとなるシングル。'04年12月「Lights」でデビュー。'05年4月に2ndシングル「Voice」、6月に3rdシングル「Sketch for Summer」リリースを経て、昨年12月21日リリースされた1stアルバム。オーディションにデモテープを送ったものの連絡先を書き忘れたという失敗を犯しながら、その歌声に心を動かされた担当者に、消印にあったエリアと珍しい苗字から探されたという逸話を持つ。



information